

「東京新聞」の「平和の俳句」に7月に掲載された句から紹介し、感想を書きたい。

「ミサイルをみじん切りして茗荷汁（みょうがじる） 西崎やよい（54歳）」
くいとせいこう これは大胆な句。科学の粋を手づかみで料理してしまう。想像の威力。> <金子兜太
ミサイルなんか茗荷汁にして食べてしましましょう。こんなもの日常性まったく無し。>なんとスケールの大きな句であろうか。そういえば、ミサイルは茗荷に形が似ている。これを、汁にして食べてしまえば、平和が来る。「武器よ去れ殺す敵など地におらず 水田雄壺（69歳）」<金子兜太
作者の自解よし。「武器を売るために戦争が必要になっている現実」と。> くいとせいこう
敵とはなんぞや、それは恣意(しい)的に作られたものだど喝破する一句。>ヘミングウェイの武器を捨て、恋に走る『武器よ、さらば』という小説があり、映画化もされた。「武器輸出三原則」で武器の輸出は禁止していた。ところが「防衛装備移転三原則」を決定し、武器の輸出を事実上、解禁した。武器で人を殺し合ったり、人殺しの武器で利益を求めることがあってはならない。

「奔放に生きるも憲法あってこそ 林和美（57歳）」<金子兜太
分かっているようで案外気付いていないのがこのこと。自由の保障は現在の憲法にあり、変にいじれば自由奔放など夢の夢ですよ。> 憲法は19条で「思想、良心の自由」、20条で「信教の自由」、21条で「集會、結社、表現の自由」を謳っている。自民党の憲法改正草案は、この自由に「公益及び公の秩序を害さない」という枠をつけている。この枠が国民を縛り、自由を圧殺していく。「奔放」という言葉が素晴らしい。自由は奔放を保障するのである。

「リヤカーで遺体回収せし父の青春 鈴木京子（58歳）」
くいとせいこう 昭和三年生まれのお父さんから、米国の砲撃でばらばらになった遺体を拾い集めたと聞いて育ったのだという。悲劇を忘れない俳句。> 戦争は死体を山と築いていく。ある牧師から下記のような痛ましい話を聞いた。天皇制に絡んで投獄された父親の牧師が獄死した。遺体を引き取りに来るように言われ、枯れ木のようになった父親の遺体をリヤカーに乗せて、教会に運んだ。関わりを警戒され、弔問に来る人は少なく、寂しい葬儀をした。戦争は国民を一方向に押しやり、異議を唱える者を抹殺していく。このことを、しかと知っておく必要がある。

「平和の俳句」選句会 ライブが行われた。俳人の夏井いつき氏がゲスト選者に加わっている。大賞 「原爆忌ボタンひとつで炊ける飯 萱原祥暢」萱原氏は「ボタンを押すのは電気釜くらいにしといてください。そういう思いです」と語っている。オバマ大統領が広島に来た時、随員が核のボタンが入ったカバンを一時も離さず持ち歩いていた。広島に来た時くらい、核ボタンのカバンは持ってきてほしくなかった。

夏井選 「朝日浴びみなわたくしの影を持ち 石黒みどり」石黒氏は「夫と二人で散歩をしていて人や木や草の影はみんな違うことに気付きました」と語る。影もそれぞれ違うように、人は皆違うということである。違いを尊重し合うところに平和がある。

入選 「もの言えぬ世の来て平和離（さか）りゆく 早船セツ子」日本は安倍政権になってから、報道の自由度ランキングが180ヶ国中、72位に急落した。もの言えぬ社会ほど、恐ろしいことはない。ジャーナリストたちは権力に怯えているようであるが、権力に付度せず、市民に事実を伝えるジャーナリストたちを応援する時に来ている。「九条を剥がしに掛かる北風（おろし） 田中絢子」安倍政権は国際状況が変化しているので、同盟国と連携した集団的自衛権も持って、安全保障を計ると言う。北風を持って、九条を葬り去ろうとしている。暖かい太陽の光の下で、鎧を脱ごうというのが九条である。